



TITLE:

日本經濟學の正體

AUTHOR(S):

作田, 莊一

CITATION:

作田, 莊一. 日本經濟學の正體. 經濟論叢 1939, 48(1): 1-17

ISSUE DATE:

1939-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131201>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號一第 卷) (十四第

月一年四十和昭

經濟論叢 每月一日發行
第四十八卷第一號 昭和十四年一月一日發行
大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

作田博士還曆記念論文集

(禁轉載)

目次

作田莊一博士肖像……………	卷頭
作田莊一博士稿「日本經濟學の正體」……………	一
日本的學問の文化史的意義及び基本的諸典型……………	文學博士 米田庄太郎……………三
東亞民族の形成……………	文學博士 高田保馬……………六
日本經濟史研究の發展……………	經濟學博士 本庄榮治郎……………五
理論學としての日本經濟學……………	經濟學博士 谷口吉彦……………四
産業組合の耕地管理……………	經濟學博士 八木芳之助……………三
印度に於ける國民的産業能率の遲滯性に就て……………	經濟學士 大塚一朗……………二
「日本的」なるものゝ意義及び探求に就て……………	經濟學士 中川與之助……………一

資本主義と支那事變……………	經濟學士 柴田 敬……………	一四二
明治時代農村手工業の消長……………	經濟學士 堀江保藏……………	一六二
我國に於ける預金通貨統計の發達……………	經濟學士 中谷 實……………	一六九
保險思想の發展……………	經濟學士 佐波宣平……………	一七五
歷史學派に於ける國民經濟の概念……………	經濟學士 白杉庄一郎……………	一八一
日本共同體經濟學の建設者佐藤信淵……………	經濟學博士 石川興二……………	一七九
國事資金法の提案……………	經濟學博士 小島昌太郎……………	一八六
農山漁村財政の五箇年記錄……………	經濟學博士 汐見三郎……………	一九九
支那の社會成層……………	法學博士 財部靜治……………	二〇六

日本經濟學の正體

作 田 莊 一

一

日本經濟學が成立するや否やの問題は、日本經濟の原理及び主義を批判的に且つ組織的に研究し得るかどうかの問題である。已に日本經濟學の研究に従ふ人々より見れば、今更かゝる問題を提出するは、古い科學の型に囚はれた偏見に過ぎないと言ふであらう。されど近世科學の古い型が今強く現代科學の進歩を妨げてゐる時に當つては、日本經濟學の學問上の地位を明確ならしめることは、先づ以て手近の障礙を排除する緊急の一作業であると言つてよからう。又或人は日本經濟の研究が必要であれば唯だ研究すべきであり、それが一の科學であるといふに何の拘はる所があると言ふかも知れぬ。それもよい。しかし何に限らず一定の問題を解明するに當つては、その解答が眞正なるかの批判に堪えなければならぬ。又一々の問題に就いての解答は中心思想によつて總持せられ、それらの間に遺漏なく重複なく、矛盾なく斷絶なく、各者が一系列に組織されたものでなければならぬ。批判を経て精確となり、組織によつて體系を持つことが研究の法式であり、研究された智識であつて始めて提起された問題に就いて全般の認識に達し、且つ本來に一體をなせる生活の實際に適應することが出来る。かゝる研究された智識が尋常の智識以上に學と呼ばれ一科の學を科學と稱するのである。日本經濟の研究が名目上科

學であるや否やは問ふ所でないが、精確と體系とを具ふべき研究たることは必要であり、その研究の成績は好むと好まざるとを問はず、日本經濟學と呼ばれるのである。

日本經濟學は日本經濟が如何にあるか如何にあるべきかを研究する一つの經濟學である。これと並んでイギリス經濟學・フランス經濟學等がある。これまでイギリス經濟學など呼ばれてゐるものは、實はイギリス思想體系の中にある經濟學説を指し、正しくはイギリス經濟學ではなく、イギリスの經濟學と呼ぶべきものである。これと同様に日本に生れ又は育つて日本の思想體系に入つた經濟學説は、日本の經濟學であり、日本經濟を研究する日本經濟學と區別すべきである。日本經濟學は概して日本の經濟學であらうが、それに入らない日本經濟學もあり得る。例へば滿洲國や支那國に在つても、後に述べる研究法に従へば、日本經濟學の研究が行はれ得る。又これまでエジプト學や支那學がその國々に起らないで、却つてイギリスやフランスに生れてゐる。これを逆にし言へば、我が國に於いて日本經濟を問題にしない數理經濟學の如きが一新軌軸を出せば、日本經濟學とはならないが日本の經濟學の中に加はり得るのである。

斯の如く二種の經濟學は交錯してゐるが、大體に於いてイギリスに生れたイギリスの經濟學はイギリス經濟を、フランスに生れたフランスの經濟學はフランス經濟を主なる問題としてゐることは當然である。唯だ十八世紀後半から興つた經濟學は、時恰も個人主義認識論に立つて國の生活を輕んじ甚しきは忘れてゐた時代の產物であつたから、知らず知らずの間に國の經濟の色彩を抜き捨て、何國にも通用するやうな無色に近い一般化に傾いた。しかし仔細に検査すれば、イギリスの經濟學には底にイギリス經濟學の色合が着いてゐることを見逃がし難い。

従つてイギリスの學校にてイギリスに生れた經濟學を講釋するときは、たとへ無色に見える學說でも説く者と聽く者との間に相通するイギリス經濟學が流れてゐる。またその足りない所は周圍に與へられる自國の生活境が彩色を加へ足す。然るに他國に於いて讀書眼の弱い人々がイギリスの經濟學書を読むときは、その表面の無色に迷はされてイギリス經濟の原理及び主義をそのまゝ無自覺に彼等自らの國に當てはめて色どるやうな錯誤に陷るのである。そのことは已にリストが指摘せる所であるが、惜いかなドイツの歴史學派が國の經濟の理義を明かになし得なかつた所から、この國でも自他無差別に見る經濟學が長く續いた。經濟學は各國經濟學であり、それ以外のものは唯一の世界經濟學であり、それらが本格の經濟學である。各國共通の概念を以て本格の經濟學と考へることは、自然科學の延長たる社會科學が免れ得なかつた必然の謬見である。

二

從來の經濟學は近世科學の一種であり、今吾人の問題とする日本經濟學は現代科學の一つとして出現せるものである。従つて日本經濟學が成立するや否やは現代科學として成立するや否やを決すべきであつて、近世科學たる社會科學に止まる限りは、日本經濟學の成立を疑ふは當然であり、又近世科學に止まる人々が日本經濟學の論議を非科學的と批難するは、近世科學の意味に於いて非科學的であると言ふに過ぎない。

近世科學は自然科學を主流とする。初めに地物を研究する自然科學が發展し、次いでこれを應用する技術科學が興隆し、更に自然科學の方法による社會科學が起つた。社會科學は自然科學の延長と見るべく、それは社會自然法則を探求する一種の自然科學に外ならない。近世科學は大體に於いて自然科學體系であり、これを以て人間

の精神生活をも説明し得ると考へた所に大なる落度がある。但し哲學の方面にてこの缺點を批判し否定せる學説も多々現はれたが、これらは概ね唯物觀の否定に止まり、國の生活や國の經濟に關しては、近世科學の缺點を指摘し得ないのみならず、寧ろ却つて社會科學に間接掩護を與へるやうな迎合的態度を執つた。個性尊重の哲學はその主なるものである。自然科學に偏倚せる近世科學は不具の學問體系である。この不具なる點を具備せしめる爲に現はれたるものが、自然より出で、自然を超ゆる存在——意志・精神・心意・歴史・文化等——を研究する現代科學である。地物自然科學に對しては人間意志科學、技術科學に對しては道義科學、社會科學に對しては國家科學が新しく登場を促がされた。今問題とせる日本經濟學は意志科學・道義科學・國家科學の流れに立つものである。

近世科學が現代にも引續いて進展することは疑ない。唯だこの科學に拒否されることは、これを以て意志活動の問題をも解明し得るとする潜越の態度である。今問題とする經濟學の如きも、これまでは社會科學として發展せる社會經濟研究に止まり、社會は自然性のものであるから、その自然科學的研究が大體に於いて功を奏した。その限りに於いては從來の經濟學も間違つてゐない。然るに我等の經濟生活は決して社會經濟に限らず、その上に國家經濟があり、これらの二つの階層を結合する所の國家の統括があつて、國の經濟（邦國經濟又は國民經濟）を形成してゐる。このことを看過せる經濟學は甚しい不具のものであり、その缺陷が今や白日の下に曝されて來た。西洋の十八九世紀に興隆した社會經濟が社會經濟學を發展せしめたことは時代的に見て必然である。しかし經濟學はもと國の經濟を研究するものであり、これを如實に示さうとするものが現代の經濟學である。

社會科學、殊に從來の經濟學の一大缺陷は、「國の生活」を看過し、「國の經濟」を忘失せることである。社會は

個人より成れる集團であり、そこでは生活主體は個人である。個人は相互依賴の聯帶關係に於いてのみ生活を営み得れども、その生活の宗旨は自己充足であり、生活の主體は獨立の己身である。個體・個性を主位に置く限りは、個人の爲に相互依賴の關係を支持する機關國家の存立を肯定するとも、超個人的全體たる國家の實在は當然に否定せられる。然るに歴史的に見れば、古代國家は次の時代に生れ廣まるべき個人を潜在せしめる全體であり、次でその個人が社會を成し社會と對立する所に個體對全體としての近世國家を現はし、今また個人を超越して包容する全體としての現代國家が現はれつゝある。通じて見れば國家は常に全體であつて個人の集團ではない。而して全體國家が古代に於いては一族團體を包容し、近世に於いては社會と對し、現代に於いては社會を合せて、常に國の生活(同じ意味を持つ邦國生活、若くは國民生活)を存続せしめてゐる。國の生活は全體國家を須つて存立し、現實の全體は國家に存し、國家はそれ自ら生命を有し生活を營む自體性を具へてゐる。我等は曾つて全體國家なる觀念を持たなかつたが、それは全體國家にのみ生きてゐたからである。近世に及んで全體を否定する個人が現はるゝに到つて、省みて全體國家の認識を新たにした。この認識を須つて國の生活の認識が明かになつた。然るに時代的產物たる近世の社會科學は全體國家を知らず、従つて國の生活を見逃がした。しかしこの缺陷も現代から見て缺陷と言ひ得るのであり、中世の神の國の思想に反抗して人の世界を強調し、人の世界には個人が雄々しい産聲を揚げて成長し來つたルネサンス以後のヨーロッパを返見るときは、近世の進歩的意義は實に著大なるものがある。然るにその進歩的近世も末期に到つては現代の進行を妨げる邪魔物となつた。近世の特徴は個性の尊重である。その思想は曾て神の國を遠ざけて人の自立を獲得したが、その餘勢は人の國をも排斥す

るに到つた。近世の窮迫に悩める人々の間では中世を憧憬する聲も高かつたが、それは近世に缺ける方面を活かさうとする點に於ては正しいが、近世を排斥する點に於いて反對のものを取擧げるに過ぎない。それよりは寧ろ更に一時代遠く立返つて古代を復體驗する方が却つて現代に進み出る端緒を掴み得る。古典研究の復活はその故である。現代に再建される全體國家は、中世の神の國より來れる專制國家と近世の社會的國家との未だ分れない未熟なる古代の全體國家から絲を引くものであり、今その再建固成の的となつてゐるものは新しい現代國家である。今ナチス・ドイツに於いては Staat 以上に Volk を立て、これに全體性を認めてゐるが、これは近世の Staat を清算し得ぬからであらう。我が國にあつては國家の全體性は不易であり、近世國家に於いて全體性が傷けられることと少く、全體性を獲得する爲に國家の上に民族を持出す必要を見ない。これは我が國體の然らしめる所である。

全體國家を認識し、その心を以て心となして周圍を眺めるとき、國の生活が全面的に見渡される。國家意志は多くの個人意志を超越してこれを包容するから、個人の存在をも認め得るが、個人意志からは超個人的全體たる國家の存在を認め得ない。個人の心をも知る國家の心と國家の心を知らぬ個人の心との孰れが高き位に立つかは言はずして明かである。近世の社會科學が時代後れの中世國家に反抗してこれを否定したことは了解し得られるが、近世國家の優柔不斷なるに憤を發して新しく起上がつた現代國家に氣付き得ないのは、社會科學そのもの素質上致方がない。又科學は近世から始まつたから、國心を研究する心理學はまだ出てゐない。國心の實在は國心に參究する者にとつては疑ないが、その心理學的説明は今後に現代科學の一として出現するであらうから、説明を欲する者は暫らくその時を待つ外はない。

三

國心クニココロに即して「國の生活」を研究するものが國學（又は同じ意味を持つ邦國科學若くは國民科學）である。國學と言ふ以上はどこかの國の生活を研究する國學であつて、何國にも通用するやうな無色の國學はあり得ない。自然科學に於いては研究者と研究對境とが性質を異にし、主客が質的に相對する關係に成立する。従つて研究主體如何の問題は一應關心の外に置かれた。自然科學の方法に倣へる社會科學も、個人意志が自然性の社會を研究するまでは、或程度まで研究主體に氣付かないでも濟んでゐた。然るに社會科學が一たび意志性の國家を取扱ふに到つて、その主體遺却の缺陷が露呈されたのである。我が國に於いては人々が、西洋の近世社會科學の原理及び主義を單に書籍に就いて學んでゐる間は無事であつたが、一たびその思想を我が國の生活に當てはめようとするとき、忽ち甚しい缺陷を曝露した。最近に於ける思想問題はその社會科學說が我が國の生活に妥當しないことを語るのである。社會科學の徒は我が國の現代的進運に對して非合理的と言ふ批評を加へる。社會科學は近世の社會の成熟後にその社會に就いて研究された理論であるから合理的と言へる。然るに現代の國の生活は近世社會を超へて新しい場面に進出してゐるから、近世科學から見れば非合理的に見える。現代を合理的に説明するものは今後に興隆する現代科學であり、その理論は現代の國の生活が或程度まで成長して批判的・組織的な智識が求め得られる時でなければ内容的には纏まり難い。今日の反省は昨日の行爲に就いて生ずる。今日に就いての理論が未だ整はざる所に今日の實踐がある。その理論の不備を難するものは愚者であり、その理論の不備を嘲つて昨日の理論を持出すものは淺はかな迷信の徒である。

國心を以て國の生活を見る學問が國學であり、國心は自然性でないから、それは彼の國・此の國の研究を共同的に集約することを以て殆ど無意義ならしめる所の自體性を具へる。従つて國學は日本國學・ドイツ國學と云ふやうに一々の國の生活に就いて成立する。單に日本の國の生活を研究するに止まらば、日本學でもよいが、日本國學と言ふ以上は、日本の國心に立ちて日本の國の生命に着眼し、この立場と目當とを連ねる視線に沿ふて日本の國の生活を全面的に見渡し内面的に見通ほして、我が國の生活の原理及び主義を究明するものである。従つて日本人でも國心を忘れた者にはその研究が不可能であり、外國人でも同情によつて我が國心を以て心とする場合には、その心持の程度に應ずるだけの研究が出來得る。またその實例がある。肝要な點は研究主體の確立であり、具體的な研究意志の體持である。國心に立ちて國の生活を見ると、そこに近世の社會科學が全く知り得なかつた視野が眼界に映じて來る。これを見る見方は主として國心を以てする大主觀であり、主客相對して客觀に終始する自然科學的社會科學と撰を異にし、道元禪師の言へる如く、我を排列して我これを見るのである。

國學を研究するには西洋近世の社會科學を去つて我が歴史的思想に就かなければならぬ。遠くは菅公が學問するものゝ爲に和魂を教へ、當時支那思想に耽溺せる弊風を戒め、近くは山鹿素行が聖人と中國との實在を支那から日本へ移して正しく思ひ直ほし、更に荷田・加茂・木居・平田の諸先覺が相續いて國學の樹立に苦心を積み、開國當時に於いては吉田松陰が刑死に先だつ五日、廣く諸流派を學んで得たる研究法の結論を簡明透徹せる文句を以て門下生に書殘してゐる。その研究法は松陰自ら企てた如く西洋の學問を受納し得る門戸を開いて置いたが、惜いかなその遺言を顧みなかつた多くの後進學徒が、西洋の學問の學び方に就いて脱線し國本を危くするま

でに立到つた。今これを正道に建直ほし、西洋の學問を批判的に包容しながら傳統ある國學を再建しようとする氣運が我が學界に力強く現はれた。それが即ち現代國學の樹立である。

現代國學が近世國學と同じ點は、國心を以て國の生活を見る點であり、これは終始一貫して變らない。唯だ前者が後者と異り、特に現代の名を冠する所以は、一つには近世國學に於いて國心と言ふは、外國心を斥ける意味にて國心を強調したるに止まるが、現代國學に於いて國心と言ふは、個人意志を超越する全體國家意志に即すべきことを主張するにある。この相違は個人意志の廣まる前と後との時代の相違から来る。又二つには、近世國學が當時盛んに行はれたる外國傳來の儒教及び佛教が我が古道を壓迫し居れるに對して憤慨し、自國開化の本流を明かにする爲に強く儒佛を抑へて力めて古道を正しく了解せしめることを趣旨としたことに對比して、現代國學は勿論古道を尊重しこれを思想の樞軸に置くことには變りないが、寧ろ西洋近世の學問によつて訓練を経たるが故に現實に深い注意を向け、現實の國の生活に存在するあらゆる生活相を包容して國の生活全般に互る問題を取挙げ、現實の生活に就いての理由と實現の生活に就いての規範とを批判的・組織的に究明しようとするのである。そこには樞軸を堅持する所から、近世の儒佛排斥に類する部分も少くないが、一層強化さるゝ點は外來のものを再批判して後なるべくこれを我が國の思想體系の中に消化し、雜然たる國の生活を整然たる國の生活に高めようとする志向が勝つてゐる。換言すれば、外來文化に對して近世國學が寧ろ消極的なるに比べ、現代國學は積極的である。この相違も時代の相違から来る。近世國學の時代には尙ほ日本の日本を守らうとするに急であつた。現代國學の起る時代は、世界の日本として、世界から眺められる日本を顧みて日本を擴充しようとする氣勢が背後

に控へてゐる。かくて三つには、この點に於いて現代國學は研究法の上に於いて近世國學に存しなかつたものを新しく加へてゐる。それは同じく國心の立場にありながらも、その立場を世界^いの地盤^いに置く^いと云ふことである。

我が國が現實の世界生活に参加し、次いで世界的地位を高めるにつれて、今では世界生活を離れて我が國の生活境涯は存しないと同時に、世界生活を見渡さずして我が國の生活を見たのではその存在を明確ならしめ得ないやうになつた。國の生活を見る立場は同じ國心であるが、その國心が立つ場面は、各國の開化が周流を経て合流に達し、世界的開化をやゝ現はして來た所の、一つの世間生活をなすに到つた世界である。徳川期にあつては、西洋には已に國々の間に周流及び合流を生じて居たが、西洋と東洋との間には觸流からやゝ未熟なる交流を生じた程度に止まつてゐた。安政元年の我が開國から世界的交流を生じ次いで周流に進み合流の端緒を開いて來た。

徳川期の人々、殊に國體を擁護するに力めた人々は、歐米との觸流に面して寧ろ危惧の念又は歐米輕侮の念を懷き、世界生活の中に國を推し出すことまでに思ひ到らなかつた。現代には已に世界の日本よりも進んで日本の世界を唱ふる者が出て來たほどであるから、國心に立つのみでなく、世界を地盤とする國心に立つと言ふのでなければ、邦國生活を明確に認識する立場とはなり得ない。これが現代國學の研究法に於ける一要諦である。但し世界を地盤とすることゝ世界を上位に置くことゝは全く異なる。世界を上位に置き世界的普遍性に由つて邦國生活を見ることは、已にそのことが近世の學問の謬見であつたのみでなく、それがまた現代國學の成立を了解し得ない重大の事由ともなる。邦國生活を上位に在つて決定するものは國家の威力であり、それを周圍に在つて規定するのは世界の勢力である。國心に立ち國心の意識より出發するとき、同時にその立場が世界の地盤に立つことを意

識するを要する。地盤を意識することは國心の意識を限定することとなるが、この意識の限定は意識を縮小することではなく、一段と精密なる意識となつてそれより出發する爲である。かゝる意識の限定を怠るときは、日本國學の外に他の國々の國學が並立することを了解し難く、また極めて未熟ながらも已に發現せる世界生活を研究する世界科學の成立——國學に比べて質的に低級なるものではあるが、ともかくその成立——を見逃がすことになる。曾て日本の日本であつた時代の國學から今や世界に於ける日本の時代の國學が復興して來た。それが現代國學である。尙ほ飛躍して日本の世界を目標とする思想も胎動してゐるが、しかしこれはこゝに謂ふ國學から超えてゐる。

四

日本經濟學は我が現代國學の一として成立する。國の生活の總體を研究するものゝ外に、國の生活の各部分を別々に研究し、その中にて我が國の經濟を取擧げて研究するものが現代國學の一科としての日本經濟學である。日本經濟學は日本經濟と云ふ一定の對境に向つてその原理及び主義を究明するものであり、それは當然に歴史及び方策の研究を包含する。國の生活が自體性を持つによつて國の經濟もまた自體性を持ち、他の國々と共通點を有し、世界普遍帶に加はりながらも、國の經濟の自體性を目標となし、これから原理及び主義が展開するやうに研究する所に一科の學問が成立する。この國の經濟の自體性をその特殊性と誤認してはならぬ。その外に世界的普遍性のものが國の經濟を包んでゐる。特殊性のみを擧げるとき不具の研究となり、普遍性のみをとれば日本經濟學ではなくなる。日本經濟學は日本の國の富が生成し歸着する構造及び過程を研究するにある。初めは日本の特

殊性とも世界的普遍性の一分野とも見分けられない以前の日本經濟自體を見る。次にそれらの普遍的なるものと特殊なるものとを分ち見る。終にこの分析の後に綜合的考察を加へて世界に於ける日本經濟の自體性を明かにするのである。尙ほこの場合に西洋の從來の經濟學を學んでこれを誤つて世界的なりとし、これによつて日本が持つ世界的分野を知り得ると考へてはならぬ。この謬見の實證は今までの所でも多々擧げ得られる。されど眞の世界的普遍性を知ること、日本經濟の研究の爲めにも必要であり、それには世界經濟學の研究を伴奏としなければならぬ。

五

日本經濟は日本の國の生活の一面であり、その研究は國の生活の自體性の中に國の經濟の自體性を指摘するを要旨とする。自體性は空間的に一統性であり、時間的に一貫性である。その一統一貫の力に結ばれる人々の一團を稱して國と言ふ。而して人々は如何なる契機によつて結ばれるかを見るに、それには略ぼ六つのものが階段をなして連らなつてゐる。最低階段には土^{ツチ}があり、最高階段には靈^ヒがあり、天地が國々の間に分たれてゐる。その間に人自身が持つものには、下部の無意識層には血と氣とがあり、上部の意識層には義と利とがある。上より指せば靈・義・利・氣・血・土の六つの契機によつて人々が一つの國を成すべく結び合はされてゐる。このことは我が國の成立に就いて見たものであるが、孰れの國々も略ぼ同様であらうと察せられる。されどこの六つの契機は國々によりて別々に存し、従つてそれらによる人々の結合が如何に行はれるかによつて國々にはそれ／＼の自體性が具はるのである。國の生活の自體性は國の經濟の自體性にも見られる。日本經濟の一要素たる土は、同

じ地球の一部たる所から他國と共通の點もあるが、また我が國のみに見られる所もあつて、我が國自體の土が與へられ、同じ土に住み同じ土に養はれる人々が土を地盤として國を成すのである。自然物としての無色なる土もそこに住む人々の生活にかけて見られるとき、風土・郷土・領土・國土など種々の色彩を帯びて来る。それを經濟生活にかけて見るとき、主として物的生産力として迎へられる。次に國の生活の基底にある土と對照されるものはその頂峯に立つ靈であつて、國は靈によつて結ばれる人々の一體の團結である。我々日本國民は 天照大御神を靈と仰ぎまつる。我等がこの靈を強く心に懷くや否やによつて國民の結合が緊密なるか弛緩するか定まり、またこの靈を仰ぐ人々が増大するや否やによつて國の範圍が擴大するや否やが定まることは、我が國史の明瞭に示す所である。これを國の經濟に就いて見れば、靈を祭る内宮の側に外宮があり、外宮に祭りある神は經濟の神である。國の生活の頂峯に立つ靈に向つての祭祀と國の生活の基底にある土に向つての經濟とは、首尾照應して國民を精神的に物質的に育て上げるのである。従つて靈を忘却せる唯物主義の經濟の如きは、我が國の生活體系には收容され得ない。今ドイツが唯物主義を排撃するに當り民族の靈に強い憧憬の眼を向けてゐる氣持は、我々にはよく了解せられる。均しく緊張してゐながらも、靈を仰ぐことを否定せるロシアには明かに焦燥の氣持が看取される。

次に血と氣とは國を構成する重要な素質であり、それが無意識層にあるだけ今まで餘り注目されなかつたが、今ドイツは國の構成に於いて血に最も主力を注いでゐる。驚くべく美事に血の問題を解決した祖先を有する日本民族は、今再び血の問題を課せられて來たが、我等は今後如何にして祖先の大業を繼ぎ得るかを深思しなければ

ならぬ。氣に就ては未だ識者の注意を惹かないが、それは一民族より成れる國にあつては、恰も極めて大切な空氣が却つて特に注意されないにも似てゐる。されど氣の一語が如何に多く人の性質又は生活の態様を示す熟語を作つてゐるかを見れば、以て氣が人々を結ぶ重要な契機たるを知ることが出来る。今ドイツ人は土と血とに就いて一生懸命に闘つてゐる。氣に就いて考へてゐるものは寧ろ東洋人である。大體に於いて氣の合つてゐる人々は血を分けた人々であるが、しかし人々の生活環境は必しも血と一致しない氣の合不合がある。血と氣とは國を成すに於いて極めて大切な契機であるが、國の經濟に就いて特にこの二つが現はれる場合は主として生産及び消費の様式及び組織である。殊に我々は日本人の氣に適する生産様式を案出することが生産の効果を擧げる所以であると思ふ。

血と氣とに比ぶれば、利と義とは意識層にあるだけ遙かに明瞭に國の構成契機たることを看取し得る。義を同ふし利を共にすることが意識的に人々を結んで國を成さしめる所以であることは、何人にも承認され得る。國が紊れる場合は、多くは人々が利を別にし義を異にして相争ふ時である。而して國の經濟に最も濃い色彩を付するものは義と利との二つである。我が國の經濟は何を以て義となし利となすかの問題は、これこそ日本經濟學が主力を注ぐべき重點である。孟子は國の根本策に就いて、何ぞ必しも利を謂はん、唯だ仁義あるのみと惠王に答へた。しかし我々は義と利とを選擇的に並列しないで、義は生活の趣旨であり、利は趣旨を達する方法であり、義は道であり利は術であると見る。従つて義の何たるかによつて何を利とするかゞ定まり、一圖に利を排斥せず、義定まつて後これに隨ふべき利を擇び出すのである。我が國の經濟は利を根本とすることを否定し、従つて營利

主義の經濟は一時勢を得てもやがて矯正される。唯だ義を實現する過程に於いて得失を考慮する方法としての利が取擧げられ、經濟生活に於いて利を主眼となすことは、權利内容を利益と見ることも共に、我が國の生活に調和しない。國の經濟が克く整ひ克く榮えるには、人々が利を共にするに先ちて義を同ふすることが大切であり、義を同ふすれば利を共にすることが出来る。尤も或時代には利を重んじ過ぎ、利を以て義に替へることもあり、その時には義を同ふし且つ利を共にすることを併せ力めなければならぬが、それは寧ろ難事である。それよりも先づ大義を立て、人々がこれによつて結び合ひ、而して後にそれに由る利の如何を考へこれを共にすることが眞に人の和を得る所以である。今我が國の現状を見るに、人々が利を別にするによつて人の和を缺いてゐる。これに處するには、それらの利の調和を計るよりも、利に走れる人々をして義に就かしめるように進んで大義を明かし、これによつて人々を和合せしめなければならぬ。資本主義は事實であるが眞の意味の義でなく、これは國の經濟にとつて何の旗幟にもならぬ。これと異り共產主義は義の一種であるが、これは勿論我が國の生活體系の中に容れることの出来ない異端である。我が國の經濟には、もとより由つて立つべき義が存する。この義を明かにして後、これを實現すべき利を考へることは、日本經濟學に於ける實踐的研究の主題である。

國の經濟の自體性は國の生活體系の自體性の内に在つて、上述の靈・義・利・氣・血・土の六つの契機によつて結ばれる人々の一體的本質である。國の生活は一體であり、殊に我が國の生活は他國と殆ど質的に異なるほどにその一體性が強固であるから、その中から別に國の經濟のみを引離してその理義を究めようとしても、多くは徒勞に終る。これこそ經濟のみの理義であると思はれるやうなものを捉へて見ると、それは經濟概論的理論に過ぎ

ないで、本格的經濟學たる日本經濟學の理論とはならない。勿論經濟生活にはそれ自らの道と術とがあるから、我が國の土が如何に國人を養ふか、我が國の靈が如何に土に對する人の行爲の上に光被するか、已定の血と氣とを具へる國人が土に對して行動するとき、またその行動の體系を立てるとき、如何なる義に由り利を採るかの原理及び主義の攻究は、他の國學の部門と並んで日本經濟學に課せられたる専門の題目となるのである。

國の經濟の自體性は、先づその源流に於いて一定の型をとる。しかし國の經濟が孤立し、國々の經濟が別々に並流する時代には却つて自他の相違が對照され得ないで各自體性は明瞭を缺く。國々の經濟が觸流し交流し、周流して終に合流し、唯一の世界經濟を成立せしめるに到れば、一見すれば國の經濟の自體性を滅殺するかに見ゆるが、實はその反對である。已に國々の交流の時にも規則正しい貿易が各國の生産及び消費の自體性を強化する。今は世界經濟の時代であるから國の經濟の研究は已に終了したと考へるものもあるが、それは寧ろ逆である。無意識なる世界經濟に流れ込んで絶えず恐慌と戦争との脅威に曝される國の經濟にあつては、人々は益々強く自國の存在を意識し、自體性の認識を深めつゝある。邦國經濟に就いての研究が態度を更新して興起し來つたことは蓋し意識が認識を生む所以に外ならぬ。

六

日本經濟學は日本經濟の事實を研究するが更に事實を解明する理由法則を求め、また日本經濟の當爲を研究するが更に當爲を保證する規範法則を求め、進んでは理由法則を總括する原理並に規範法則を總括する主義を求める。それらの事實及び當爲の内容を盛つて、原理及び主義の筋目を正だし整へるときに、一の體系を成せる日本

經濟學が成立する。その原理及び理由は事實に對し、主義及び規範は當爲に對して、一般弘通性を有する。弘通性を有するものが即ち普遍的法則であり、一國に關する經濟學も亦普遍的法則を求めるものであることを注意しなければならぬ。何國にも弘通する法則でなければ經濟學上の法則でないと考へた近世の經濟學は考へ違へであり、共通の概念ならば各國に通ずるものもあるも、國の生活に關する事實を解明し又は當爲を保證するに足る所の普遍的法則は、國が自體性を持つ通りに、國毎に具はるものである。各國經濟の間に類似點あり共通點あり、更に普遍帶もあり世界的普遍法則もあるが、それは決して國の經濟を覆ふものでなく、經濟生活に關して現實の動向を示す原理や實現の指導をなす主義は、僅少なる世界的普遍の法則を受け持ちつゝ、主として一定の領域を有する國の經濟に具はるのである。

國の經濟は國の生活の一部面であるから、國の生活全般に關する原理及び主義は、經濟の原理及び主義を認めつゝ而かもこれらを依據せしめる。我が國體の本幹と我が國運の主流とは決定的に我が國の經濟の原理及び主義を統制する。従つて例へば社會主義が我が國に移入されるに當つても、その中に含まれる資本經濟への批判の如きは、我が國に資本經濟が行はれる以上、國情による變更を留保するにせよ、尙ほ批判としての價值を失はない。されど一たび我が國體及び國運に照らして見るときは、社會主義そのものは到底我が國の經濟にとつて許容さるべきものでない。日本經濟學の内容には經濟學ならでは究め得ない幾多の原理及び主義があるが、しかしそれらも我が國體及び國運に適ふものでなければ、決して日本經濟學の内容とはなり得ないのである。